

しました。生き残り全員百人が見守るなか日本軍の武器、弾薬一切を積み込み海上で投棄しました。

その後十五日ぐらいして生き残りの兵隊全員を米艦に乗せて身体検査をして、労働に堪え得るかどうかを見たところ、一人として労働に堪えられない者無しと判定され日本に直行帰国となりました。労働に堪えられると判定されたらフィリピンのマニラで労働させられるところでした。

昭和二十年十一月二日、浦賀港に到着しました。二日間浦賀で休んで我が家に帰ったのは約三年振りの昭和二十年十一月四日でした。留守家族は皆無事でしたが長男に戦死の通知があり残念でした。私は軍人恩給は僅か三カ月不足でもらえませんがマニラで労役に服していたらと思うことともありますが果たして無事にマニラから帰れたか？と思うとあきらめがきます。山形県出身の兵隊でニューギニアから生還したのは僅か五人だけと聞いております。ですから戦友会はありません。

海上機動第二旅団第二大隊・行動概要

佐賀県 織田 武

私は大正十（一九二二）年二月、広島で生れました。そして昭和十七（一九四二）年一月十日、現役兵として歩兵第四十八連隊補充隊に入隊、久留米で初年兵教育を受けた後、四月二十二日門司港を出航、翌二十三日釜山に上陸、二十七日鮮満国境を通過、歩兵第四十八連隊第九中隊（剣第八七〇七部隊）に転属を命ぜられ、二十八日、東寧県城子溝に着きました。

かくして入隊より六カ月、七月十日に一等兵となり、下士官候補を命ぜられました。昭和十八年一月に上等兵、七月に兵長となり、十二月には伍長となり、昭和十九年を迎えました。

当時、大本営は北方進攻作戦（対ソ戦）を中止して南方作戦（対英米戦）に方針を変更し、関東軍には専守防衛態勢をとらせたといわれています。

ですから大東亜戦争開始直前の南方軍戦闘序列に、関東軍から戦車、砲兵、航空などの各部隊を編入しましたが、進攻第一段作戦が順調に終了すると共に、主力は関東軍に復帰しております。

しかし、戦局の推移に伴い、昭和十九年に入りますと、これまでに増して関東軍の抽出・転用が相次ぎ、師団転用も次々と実行され、太平洋島嶼、フィリピン諸島、沖縄、台湾などに転用されていきました。

一方、米軍の海兵隊に当たる部隊として、昭和十八年我が国で初めて海上機動旅団の編成が行われ、これらの編成にも、主として満州独立守備隊から抽出された部隊が編成に加わりました。当時編成された海上機動旅団には次の四つがあります。

第一旅団(駆・カケル)、第二旅団(巡・メグル)、第三旅団(轟・トドロキ)、第四旅団(擁・ハラウ)

の四個旅団です。

そして第一及び第二旅団は南方作戦、第三及び

第四は北方作戦に編成整備され、舟艇による敵前上陸、逆上陸または海軍艦艇により勝敗正に別れんとする機に、全軍の捨て石として投ぜられる等が主たる任務であったといわれています。

私が昭和十九年三月三十一日に転属した海上機動第二旅団は、三月十九日、満州遼陽において編成に着手、三月三十一日に編成が完結しております。その部隊の抽出・編成状況を見ますと次のようで、前記のように満州部隊の転用を主として満州で編成され、それぞれ重要な戦域に投入、展開されています。

(一) 第一旅団 満州第三独立守備隊のうち第十一大隊(昂々溪)、第十五大隊(礼蘭屯)第十六大隊(白城子)の三個大隊が満州において編成され、昭和十九年一月四日、太平洋上マーシャル諸島のクエゼリン島に上陸、二月一日米軍上陸により同八日玉砕となっております。

(二) 第二旅団は第五独から第二十七大隊(一面坂)第二十九大隊(ハルピン)第三十大隊(ハ

ルピン)の三個大隊を歩兵部隊の主力とし、それぞれ次のように呼称された。

独歩第二十七大隊(第三三八部隊)

…巡第三一八一部隊

独歩第二十九大隊(第四九部隊)

…巡第三一八二部隊

独歩第三十大大隊(第八二二部隊)

…巡第三一八三部隊

(三) 第三旅団 第二独歩のうち第七大隊(吉林)、

第八大隊(敦化)、第九大隊(名月溝)の三個

大隊が昭和十七年四月、「アツツ」及び「キス

カ」二島に派遣された山崎部隊に加わり、初

めての玉砕となり、昭和十九年三月二十六日

占守島において再編され、同二十年五月二十

三日鹿児島山川港において独立混成第一二

五師団隷下に入り終戦を迎える。

(四) 第四旅団 昭和十九年三月五日、北海道旭

川において編成され根室、埼玉県杉戸を経て

八月十五日の終戦を迎えた。

このように満鉄の守備に任じた独立守備隊は第十大隊の一個大隊が最後まで関東軍の直轄部隊として残ったのみで、その終焉を迎えています。

このようにして海上機動第二旅団は誕生しましたが、昭和十九年三月、独歩第二十九大隊、同二十七大隊、同第三十大大隊とともに軍令陸甲第一〇六号により松尾常吉陸軍中佐を大隊長として海上機動第二旅団機動第二大隊が現地で編成されました。

その人員編成は独歩第二十九が全体の四六・四%を占め、全体として大隊本部百三人、第一中隊百九十七人、第二中隊百九十七人、第三中隊百九十七人、迫撃砲中隊百五十五人、砲兵中隊百二十一人、作業小隊六十六人、合計千三十六人でした。

また装備については、重擲三十七、軽機三十六、曲射砲(九七式)、歩兵砲二十一、軽迫三、速射砲二、山砲(四一式)三が各大隊の装備でもありました。

ほかに機関砲隊(高射機関砲六)七十六人、戦

車隊（軽戦車九）六十六人、工兵隊（四個小隊、一器材分隊）二百四十三人、通信隊（二個中隊）百三十九人、輸送隊（輸送中隊四個・護衛中隊一個・材料廠一個・特大艇十・大発百五十・駆逐艇十・SS艇三）千五百三十九人、衛生隊百九十人。

昭和十九年三月三十一日、編成を終わつた海上機動第二旅団は、四月三日にハルピン出發、翌日関東州を通過し四月十二日に大連港を出航しました。

このように旅団が編成完結されて四月十二日に大連出港までの期間に訓練が行われましたが、敵前上陸の訓練でさえ単に木材を筏大に組合わせた平面状の宙吊り板を、波浪上の船底とみなして降下するという程度のことだったのです。

しかしこの編成上最大の課題は、輸送隊の編成にあったのです。輸送隊長は編成命令を北支で受け、台湾台南に赴任して、在満からの優秀部隊と言われた要員の到着を待ったのですが、その船団は海中に没し、それがため現地兵の召集に依存す

ることとなり、ために編成は遅延し、ようやく五月二十八日に出發して旅団を追及するというものでした。

その時に「青葉山丸」に乗船の旅団主力は、既に比島ザンボアンガに揚陸していました。その上シンガポールで受領することとなっていた舟艇は一隻すら無い輸送隊で、また、その装備は小銃百七十二挺、小銃弾五千八百二十発のみが支給されたという驚くべき編成状態でした。

ともかくも、昭和十九年四月十二日、青葉山丸に乗船、大連を出發、二十八日台湾高雄に入港、五月五日マニラに寄港して五月八日ミンダナオ島のサンボアンガに上陸しました。

大連で乗船した「青葉山丸」は、一万余トンの貨物船でしたが、四千人余の兵士が乗船するため船倉は数段に仕切られ、俗にいう蚕棚で、一人がようやく横になれるほどの場所を確保できる程度でした。

行く先について旅団長の語ったところによりま

すと、シンガポール行きの命令が伝えられ、また輸送指揮官によるとベンガル湾上のアンダマン諸島かともいつておられました。が、何も知らされないう兵には行く先は全く五里霧中で、ひたすら波穏やかな黄海上を南進して内地の門司沖に到着しました。

このように船団は一気に南下せずに朝鮮海峡を通過し、大連を出港して朝鮮半島沿いに南下した同じ海路を逆に北上して中国の山東半島に最も近距离を青島半島方向に西進しました。これは当時既に敵の潜水艦の攻撃が激しく、欺瞞ぎまん作戦として陸地に沿いながらの航行であったのです。

このように連日中国沿いに南下し、天長節の四月二十九日には台湾高雄港に寄港しました。内地出港以来約二週間で、船底側面に群がる現地人の物売りジャンクを初めて目にした我々にはこのの外珍しい光景でした。日本円が自由に流通する台湾ですのでバナナなど買って頬張った懐かしい思い出があります。

しかし快晴に恵まれ、船の揺れも無かったのですが船倉内のいきれ、猛暑、油の臭い、空気の汚れには全く我慢ができず、出発当時の気迫も次第に落ちてきました。そして一週間にして比島マニラ沖に仮泊することになりました。

そして五月六日、マニラからダバオに向いました。全員が甲板上にあがって海上警戒に全神経を注ぐなか、夕刻一大喚声が上がリ、敵潜水艦の放った一条の雷跡が見える。しかし、危険海域の中、船舶はいち早く反応して船首を右舷にかわしました。「面舵いっばい」と船長の声が聞える。やがて明け方西方の天空の黒雲の影に月が隠れた一瞬、「グワーン」と敵の魚雷が左舷船腹に命中、貫通して対岸で轟音とともに炸裂しました。

甲板上はたちまち大動揺の中、激しく流入する海水により船は前方に傾斜する。ようやく平衡を得た「青葉山丸」は微速度での航海を続け、翌八日ミンダナオ島ザンボアンガ港に入港揚陸しました。

前日の魚雷攻撃を受けた地点は東経一二二度、北緯八度付近で、死没者約五人を出したといいますが、ほかに戦車、水陸両用自動車、山砲、弾薬のすべてを喪失してしまいました。

サンボアングでは同地付近の警備についていましたが、六月四日、ニューギニア北端のビアク作戦に参加のため軍艦「巖島」にてビアク島に向いました。しかし戦況不利によりニューギニアのソロンに上陸、同地の警備につきました。このビアク島逆上陸の軍電令は、五月二十九日急遽サンボアングに集結を命ぜられ、次のような電令でした。

「連合艦隊。電令 作第一〇二号 昭和十九年五月二十九日 二三 四二号発電 連合艦隊ハ一部兵力ヲ以テ在「ザンボアング」海上機動第二旅団ヲ急速「ビアク島」ニ輸送シ 同島ノ確保ヲ期セントス 本作戦ノ実施ニ依リ 敵機動部隊ヲ誘出シ「ア号」作戦ノ端緒ノ啓開ヲ企図ス 本作戦ヲ渾作戦ト呼称シ 同部隊ヲ渾部隊ト呼称ス」

これにより旅団は主力戦闘部隊二個大隊二千五百人が先発し、残余は後日遅れて出発することになりました。旅団主力は五月三十一日、重巡洋艦「青葉」を旗艦とし軽巡洋艦「鬼怒」等をもって夜間二十時ザンボアングを出発し、同六月一日朝ダバオに到着しました。

我が第二大隊は六月四日「巖島」に乗船、ザンボアングを出発し旅団の主力を追及しました。しかしその後この「渾作戦」は中止となり、六月七日夜、ソロンに揚陸となりました。

この揚陸作業は豪雨の中、全身ズブ濡れの中で続けられ、雨の止んだ翌朝、衣服を乾燥させる大乾燥場がにわか形成されました。

当時のソロン地区には第三十五師団司令部及び隷下各部隊、野戦高射砲隊、飛行場設定隊その他多数の兵員が駐屯しており、翌日からは日中必ず一度は連合軍飛行機による機銃掃射がありました。これに対して友軍機は全く姿を見せず、六月二十二日、部隊は二週間に及ぶソロン地区警備を離れ、

対岸の無人島「サラワティ島」へ配備変更となりました。

このサラワティ島はミンダナオやソロン地区とは異なり、魔の大密林の島で、パプアの言葉で「死の島」と呼ばれています。海岸には木造の棧橋跡があつてかつての南洋興発(株)の出先機関の跡地でもありました。

大隊はこの跡に駐屯することとなり、簡単な高架式木造住居部隊長が入居しました。特に辛菜の群生があり、新鮮な野菜に飢えていた我々は歓声を上げて喜んだのですが、しかしこれも大部隊にとっては数日で食べ尽くしてしまいました。

旅団では第一大隊をワイゲオ島の守備に移駐、一部はソロン本島のマビの警備に当てたほか、司令部以下はこのサラワティ島の防衛任務に就くことになったのです。渾作戦でビアク島に上陸を敢行したならば完全に玉砕となっていたであろうと玉田旅団長も語っておられたが、その玉砕を避けたこの死の島での生活は、とりわけ生死を分けた

悲惨極まりないものとなりました。

このサラワティ島へ上陸当時は、各人の携帯天幕を合せて宿舍としましたが、猛烈な連日のスコールには抗すべくもなく、やがて直上する小木を組み上げ小屋づくりを行いました。一メートルほど高く床を組み地上からの害虫を避け、またマラリア蚊を防ぐため就寝時は防蚊網をかぶつたのです。

上陸当時、旅団はどれほど食糧を揚陸したのか不明でしたが、当初は米と乾燥野菜、粉味噌などの配給がありました。肉の缶詰も汁の中を泳ぐようなものになった程度で、食事に対する不安が最大の関心事となりました。

昭和十九年六月二十二日、サマテに上陸した直後、大隊本部員ら二人は六月二十七日に早くもマラリア罹患第一号となり、同年六月以降十二月までに死亡した兵員の数は四百七十人に達し、大隊の四六%強となっています。

気象は日本のように四季は無く、雨季、乾季共

に長く、一日の気温は最低二一度ないし二二度、最高二七度ないし三〇度、居住は、前記のように上陸当初は各自の携帯天幕などを使用しましたが、逐次丸太を結束した掘建小屋とし、床は細丸太に樹葉を敷き約一メートルほど床上としました。

飲用水は淡水井水を利用しましたが、給養は常に円滑を欠き、主、副食は質量共に漸減、低下し、やがて農耕、漁労、狩猟、澱粉採取等をしてこれを補うような有様でした。

マラリアはサラワティ上陸後八、九、十月の三カ月は他の疾患に比し圧倒的に多数の発生を見ました。熱帯熱が最も多く、三日熱混合型などで昭和十九年には発生患者数千八十五(内死亡八十二)、二十年には二千五百七十(内百二十三)となっていてマラリアによる死亡は体力の劣えもありましたが恐ろしいものでした。

また脚気があります。脚気患者の症状は浮腫型を主とし、衝心型、神経型などがあり、単独に神経症状のみを示す患者はほとんど無く、軽度の浮

腫を伴うのが通例でした。その症状は微熱、便秘、下肢倦怠、浮腫、腹部膨満感、腱反射減退または消失で、顔面浮腫は時により最初より来るものあり、治療にはビタミンB₁欠乏が主因ですが、これらの補給や入手は思うようになりませんでした。また浮腫も高度の栄養の不足、過度の筋肉労働、多湿、採光不充分等によるものと思われ、その病状は徐々に発病し、顔面(特に眼瞼)や下肢大腿、腹部、胸部、上肢、頸部の順に多く、通常一〜二週間にて軽病者は治癒しますが、重症者は六カ月の長きに及ぶ者があり、死亡率は五五・六%、再発率も八〜九%に達していました。

最も多く流行した皮膚病は湿疹庇疹で特に昭和二十年五月ごろよりいわゆる「カイカイ」と称する病性の発生が多かったのです。

総じて魔の密林の島といわれるだけあって、前記のごとき病症が多く発生し、報告書によりますと、昭和十九年五月から翌年十二月に至る間に発生した患者数は、マラリア二千三百三十四人、脚

氣九百四十八人、胸膜炎三百七十人、急性腸炎二百二人とあります。これらが著しく発生した病気であつたのです。

前述のように連合軍の西進作戦の進展により、昭和十九年九月にはビアク島に上陸され、この島への逆上陸作戦であつた「渾作戦」もその勢力の大差によって中止となり、ソロン地区に上陸しましたが配備変更となり、「死の島」と呼ばれていた「サラワティ島」に上陸し、戦闘と病魔との戦に明け暮れていた状態でした。

以下、終戦に至る海上機動旅団第二大隊の経歴は次の通りでした。

昭和十九年十月十日 第三十五師団で行われる北岸作戦に参加のため第二中隊はソロンに前進

昭和二十年一月十六日 北西作戦参加のため大隊長以下七十人ソロンに前進。第一、第三中隊、迫撃砲中隊、作業小隊はサマテ残置
同年二月二十一日 第二中隊長以下七人、サン

サポールの戦闘において戦死

同年三月五日 大隊主力、マビに着

同年四月二十一日 サンサポール着

同年六月十日 北岸作戦終了

同年六月二十三日 第二中隊はソロンに残置し

て大隊長以下の参加兵員はザマテに帰着

同年七月上旬 大隊(第二中隊を除く)は、サ

ラワティ島南端中央付近にあるソロールに移

駐(自活のため)

同年八月二十五日 作戦任務解除、同地におい

て終戦業務及び自活

そして終戦後の翌年、終戦以来既に二百四十余日を経た昭和二十一年四月二十日 今日か明日かと帰還船の到着を待ちわびていた部隊に突如、蘭軍基地ホーランジャへの使役要員派遣の命が下りました。

その基地は連合軍の飛石作戦により、昭和十九年六月二十二日既に逆上陸され、我が第三十六師団が敗退した地区で、ソロン地区から距離にして

約千四百キロメートル東方のニューギニア本島太平洋側中央部でした。

選別された我々三十九人は作業要員として四月二十一日ソロンを出航、四月二十四日ホーランジャに到着しました。ホーランジャは連合軍の一大兵站基地で山積された物資に度肝を抜かれ、蘭軍の監視の下で各作業に従事させられました。

サラワティ島の昼なお暗く、飲料水のない地帯とは全く変わった日常生活を送ることになったのです。かくして僅か一カ月半した六月八日、帰還船リバティ号がやってきて喜びの帰国の日が来ました。

広場に並列し、一切の持ち物の検査が行われて乗船しましたが、ホーランジャへ行った私たちが作業隊は本隊より一カ月ぐらい遅れての復員となり、和歌山県田辺港に上陸しました。

六月十九日のことでした。